

「五姓各別」説とインド瑜伽行派
—種姓のない者の源流と展開を中心として—

岡田 英作（京都大学）

インド大乘仏教二大学派の一翼を担う瑜伽行派は、般涅槃への到達や菩提の獲得に関する可能性の問題に対して、“gotra”（種姓）という概念を用いて独自の説を展開してゆく。後に瑜伽行派の種姓説では、衆生の属する種姓を、声聞・独覺・菩薩という三乗の種姓、確定されていない種姓（不定種姓）、般涅槃へ到達ないし菩提を獲得し得ない無種姓、という五種姓の何れかとして体系付けている。瑜伽行派における五種姓の体系については、中国や日本仏教において特に注目されることになるが、唐代の訳経僧である玄奘を鼻祖とする法相宗の教義として知られている。また、中国や日本仏教に関する従来の研究では、この五種姓の体系を「五姓各別」説と呼ぶことがある。

本発表の前半ではまず、「五姓各別」という術語の使用範囲から検討に入る。「五姓各別」というこの術語は、管見の限り、日本の平安時代後期の文献までにしか用例を遡れず、少なくとも中国撰述文献に見出せない。したがって、「五姓各別」という術語が日本において初めて使用された可能性を、同術語が見出される文献の用例から指摘したい。その上で、「五姓各別」を、インドおよび中国仏教における五種姓を述べる教説と区別し、日本仏教的な種姓説の枠組みを示す術語であると理解する。こうした「五姓各別」説の文脈においては、いわゆる「一切皆成仏」と「一分不成仏」との教義が対立しており、その対立では、五種姓の中で無種姓に属する者、つまり種姓のない者が重要な主題として扱われていることが認められる。

そこで、本発表の後半では、種姓のない者に焦点を当てる。まず、インドの瑜伽行派における種姓のない者の源流として、種姓のない者は般涅槃し得る性質のない者（a-parinirvāṇadharmaka）であるなどの、『瑜伽師地論』における規定を、佐久間秀範氏や発表者などの先行研究を参照しつつ整理する。次に、種姓のない者の展開として、日本の「五姓各別」説でも種姓のない者に関する典拠に挙がる『大乘莊嚴經論』と、チベット訳のみ現存するアスヴァバーヴァ著『大乘莊嚴經論広注』を取り上げる。『大乘莊嚴經論』では、種姓のない者を般涅槃し得る性質のない者と理解して、一時的（時辺）か永久（畢竟）かという期間に応じて2種に分けており、この点において、日本の「五姓各別」説と瑜伽行派とは共通の理解をしている。いっぽう、『大乘莊嚴經論広注』では、種姓のない者に関する議論に見出される“a-parinirvāṇadharmaka”という語の「否定辞 a-」の意味を文法的に検討する、という瑜伽行派独自の展開が見られる。

以上のことから、日本の「五姓各別」説とインド瑜伽行派との間では、同じ五種姓の体系を有しているにもかかわらず、種姓のない者に関する理解の仕方に異同があると言える。最後に本発表では、こうした異同の背景を、日本とインドとの交流の壁、すなわち言語的な問題ならびに仏典の流布状況の相違という点から考えてみたい。

キーワード：五姓各別、無種姓、仏典の流布状況